

食物の本ありがたし。

九月六日、――

雨の日のをぐらき土間のながしもと

ひそやかにしてこぼろぎなくも

横田へ出かけていつて、たゞ一人でいられる君の父君にお目にかゝつた。お柳さんの父君にあてた手紙も見た。君の目も見た。そして、君は、父君にも、妻にも及ばぬ事遠いとはつきり直観した。つとめてくれ給へ。師の眼はするどい。師の鞭はいたい。師の涙はせつない。この師、今やなし。

父は今、松本で瀕死の病床にある。妻は今、秋蠶でやせて働いてゐる。私は、相も變らず夢をえがいて、こんな原稿をかいてゐる。はかない夢を追ひまはしてノタレ死する前に、一日でも、しみ／＼と老父に仕へ、妻をいたはりたいものだ。どうして自分は、父や家内や小林先生などのやうにスラリと丸くいかないのだらうか。絶えずガツ／＼してゐる此の魂を丸くしづめる法はないか。蟬がカラをぬぐやうに、自分の情勢からスツポリぬけ出る法はあるまいか。あゝ、つたなき性の悲しさよ。私のカクナ心やあぶない足どりを、師は地下からお案じ下さつてをらうのに。

○ その年は毎週一回松本の女子師範へ出ることになつた。

小林先生は、師範學校から三四丁はなれた同心町に居を定めてをられた。ある日およりしたら、

「これから、師範へ出る日には、お晝マンマを進ぜたいで、何にもないが、食べておくんな。」

と言つて下さつたので、御心にあまへることにした。御飯のあとでは、ためておいた質問をおたづねしたり文學や民俗學の御話をおきゝしたり、世間話に花を咲かせたりした。

先生の御話をおきゝして見ると、今まで百姓の「仕事」とばかり思つてやつてゐたことが、實に根の深い信仰行事であることが、ハツキリして來た。民俗學なんていふものは、古い／＼昔噺を集めていぢくるものかと思つたら、人間生活の奥底を永遠に流れてゐる必然性(どうしてさうなるべき性質)をつかみ出すものだといふことがわかつた。そして、人間生活の必然性は時代によつて形や名前はかはつても、必ずあらはれてゐるものであることにおどろいた。

○ 毎週うかゞつてゐるうちに、どうも断片的な御話だけでは足りなくなつて、本式に學問として、くはしく御教

小林先生の思ひ出

十一月十六日、――

ありがたう。今はもうあの雑誌は、一つのたのしみにして居ます。代田さんとんだ事でした。よろしく申上げて下さいませ。お柳さん如何ですか。小生耳遠くなる様にはならぬとの事です。いろ／＼きけないで、らくでもあり又おかしなものです。波多の成功を祈ります。

○ 十二月二十八日付。私が滿洲へ旅に出たルスへ家内に下さつたはがき。

ありがたう。耳も聞える様になりました。おからだ大事にして下さい。ことに身重の由、一層お大事になさつて下さいませ。どうぞお父様によろしく申上げて下さいませ。恒男様もうおかへりでせうか、どうぞおまめでいらつしやつて下さいませ。かういふやさしい所が平生の先生であつた。

○ 書きおとしたが、先生は昭和二年の春、岡田小學校へうつり松本から通つてをられた。三年三月、私は信州へ歸つて、この波多村で百姓をはじめた。

○ を受けたくなつてしまつた。ところが、松本平一たいの教育者の間に、やはりさういう希望が起つて、つひに毎週土曜日の午後、松本市旭町部小學校を借りて、講義をおきゝすることになつた。私は悲しい事に百姓仕事に追ひ立てられて、行かれぬ事が多かつたが、何でも岡田や和田や松本の人達が主に世話をしてくれたやうであつた。

○ 私は二度だけおきゝする事が出來た。一度は「たましひの話」一度は「うらなひの事」であつた。

たましひと言へば何か幽霊か人魂のやうな物かと思つたら、さうではなくて、今かうやつてペンを動かす、またこの文をよんでゐるこれであつた。軍人が命のやりとりするやうに、我々は毎日たましひのやりとりをしてゐるのだ。小林先生の御話をきいて和合の浅い學問をすて「なるほど」と思つた。そのセツナ先生のたましひに征服されたのだ。同時に和合の體にはそれだけ先生のたましひが入りこんで、和合は前より力づよいものに變つたのだ。人間はたましひの入れ物である、野にさく花を、

「おゝ、きれいだな。」

○ と見とれた時、我々は花に「たましひを奪はれ」、同時に花の精靈が我等の中に入りこんで活きて行くのだ。飯をたべるのも、米のたましひをとり入れてその靈力によつ

て活動することである。神や佛のみ前にひれふすのは、一匹の動物としての我等の精霊を投げ出して、天地一ぱいの偉大なたましひを身につけることである。あらゆる信仰の行事、いなむしろ、あらゆる人間の行事は

精霊と精霊とのかけあひ、

たましひをよびよせる「招魂」、

神のたましひを身につける「鎮魂」又はかたまひづめ、

たましひの發展分裂するわけかたま

かたまのふゆ

といふやうな事實になつてゐる。朝おきて顔を洗ふことから、晝間セツセとはたらくことも、夜はグウ／＼眠ることまで、すべてふしぎなたましひのふるまひである。

人間シンケンになりきつて事にあたる時、神の御心をうかがつて、それによつてたましひをキチンと決定してから着手する。それからうら／＼になる。くじびきも、農事の試作も、みなうら／＼である。

それがすゝむと、神とあらかじめ約束して条件をきめて、

「これが御心にかなふものならかう出る、かなはぬものならあゝ出る。」

ユツとおさへて死生をふみこえてしまふ。

しかし、人間のたましひが最も飛躍して恐ろしい力を發揮するのは、わが心身をはらひきよめて、全くからつぽにし、そこへ天地の神のたましひをソツタリ宿らせ人間社会のたましひを廣くとり入れた時である。日本の宗教的行事や修養法は實にたゞ此の爲であつた。かくして神のたましひ民衆のたましひがのり／＼ついで、人間の口から神の意志や社会の全體意志がほとばしり出るのを、のりとといふのだ。

かうしたことを、先生は、古今の文獻や言葉や民間風俗によつて、くはしくお説きなされるのだつた。

しかも、今、壇上に立つて、語られる時の先生は、フダンの先生とは全く別人である。いな、人であるか神であるか、とにかく一同のたましひはピツタリとひれ伏した氣持で、咳一つせぜ、一語一語がビリ／＼と肺腑にひびきわたるのだつた。これこそ活きたのりとである。

先生は、その學問で説かれる通りを、身を以て實地に示されるので、「なするほど」と話が腹に入つた。

私のやうな貧しいたましひを以て、先生の話のすじを、右のやうに書いたところで、讀者の多くはたましひの正體にふれることが出来ないであらうと、悲しくなる。

小林先生の思ひ出

といふ風にして、それからうが／＼ひをたてる。これをうけひといふ。いかに人間のチエをつくしても、人間の力できめたものは、いざといふわかれ目でたましひがグラ／＼するものであるし、ことに共同の仕事になるとくづれやすい。たとへば仕事の手わけをするにもジャンケンで勝つたらあれ、負けたらこれときめておいて、ジャンケンをすればセイ／＼ときまる。いくつかの部落のどこから先に水をかけるかといふ場合に、神前に於て角力や競馬によつて決定したのも、うけひである。今はそれがお祭のたのしみにかはつてしまつたわけである。

更に、人間のたましひの動きが強い場合には、かうなるやうにといつて、神様や物の精霊を動かさうとする。元旦早々。

「おめでたう」「おめでたう」

といつて其年をめたくする。正月の行事に「物作り」などといつて、餅で作物の形をこしらへて柳の枝にかざるのも。

「このとほり見事にみのれ」

といふ心である。これをほめる、ほぐ、ことほぐ、ことぶく、いはふなどといふのである。

いよ／＼人間のたましひの動きが、最もきどい所になると神をも叱咤し、または我がたましひを我が力でや

なほまた或る人たちは、マルクス流の唯物觀と反對のもの、空なるものと批判し去るであらうと、先生に對してすまなく思ふ。

先生は、米のたましひ、着物のたましひ、土地のたましひ、といふ言葉をよくつかはれて、唯物觀の人たち以上にもその力を大事に見られた方である。世の精神家のとくたましひとは似てもつかない。どうか、いはゆる精神家たちも唯物家たちも、物質だの精神だのといふ空なる名前の區別をすて、活きた眞實をシカとつかんでいきたい。

○ お話のあとで、お茶をのみ、煎餅をかぢりながら、坐談や質問があつた。私は、どうして先生はこんな學問を勉強され、且學問と合致した心境を得られたのか、フツギでたまらなんだので、それをおき／＼した。

「ひどい事をきくやつだナ」

と笑はれて、

「それぢや一つだけ。こんな事もあつたよ。」

といつて、わからん本を布圍の下に置いて工夫された話をなされた。(これは前に書いたから省く。)

お茶の終りに、會費五錢づゝ集めることになつてゐた。先生はニコ／＼しながら、しかもマジメに

「五銭はチト高いな。ハガキとセンペイで三銭ぐらひにならんかね。もうけるとバチがあたるぜ。ハ、ハ、ハ、いや冗談ぢやねえぞ。」  
私のやうな貧乏人には、先生のつましい心づかひが實にありがたかつた。

歸り途で鈴澤先生が、

「古事記の一言主の所はどういふ話でございますか。」とたづねられたら、小林先生は言下に

「右なら右、左なら左と、一言でキチンときまつて、考へたり口を出したりするスキが一點もないのが一言主かと存じます。」

鈴澤先生は、ハタと膝を打つて

「ハ、ア——なるほど。」

禊の一段論法も神ながらののりとも、これだなど、私は勝手にきくとつた。鈴澤先生はつゞいて、

「雄略天皇に全く同じ言葉をかへしたといふのは、何でございますか。」

「その土地土地にゼツタイ權威を持つた境の神があるて、天子様のお家と對等に立つてゐた時代の物語が残つたのかと思はれます。」

「フ、ム、——なるほど。」

また全身でうなづかれた。

禊でねりあげて神ながらの心境に達せられた鈴澤先生と、神ながらの體驗から禊の境涯を手に入れられた小林先生、——ふたりの偉大な眞人が、一言一句の中に、全力でわたり合ふ見事な太刀打を、私はうしろからジツと見入つて感歎にたへず、おどりがあつた。

六月七日付のおはがき、

土曜日はなしは、やすみます。何分よろしく願ひます。次のは又あらためておしらせいたします。

私が忙しい中からとび出して可愛さうと思はれてのおたよりであらう。

七月六日付おはがき、

梅雨があがつてもうそろ／＼お忙しい事です。今度の月曜日には家内中るすになります。家内は多分和田へかへつて居ることになりますし、私は少し勝手な用事があつて北信の方へいつて四五日間あそびます。奥様父上様によろしく、急に山川がこひしくなり、野原や林がなつかしくなりました。

北信への用事といふのは、須坂方面の教育會に文學史か何かを講ぜられた事であらうと思ふ。

## ○

こんな御はがきもいたゞいた、——

今日は二十日で御座います。まだおあついでございます。このごろになつて、私のうちへは、支那から、ちいさい子供が二人、大人が来て、ごたく／＼してゐますから、當分食膳を進せ申す事が出来ませぬ。何分よろしく、父上様の御老體、奥様のお弱いおからだ人事ならずおもはれます。身神ともしづかに、萬事においとひなさる様願ひ上げます。

私の働きぶりがあまりにはげしくて、氣持もいきなりたつてゐるのを、見てとられて、このやうな戒めをたれられたのだ。

## ○

秋すぎになると、先生はいつの年も風邪ひきがちで、引こもつてをられた。私のとがつた神經は、先生の御體具合をお察し申す餘裕がなく、時々おたづねしては話しすぎ、尙、ゼヒ冬は古事記の講義などとせがむのであつた。先生も、

「それでは何か一しよに讀まう。」とおつしやつた。

翌年の二月に入つて、しかし、こんなおたよりを受け

このころはありがたう。今年の冬はとても本よむ事其他、何か話をする事は駄目だと醫師にかたく申聞かされました。萬事すきな事から遠ざかつて、ひたすらに心しづかにせねばいけない、と申聞かされました。右のろくまくがいけないとの事です。どうぞ、何もかも浮世と縁を絶たせておいて下さい。人様にいろ／＼言はれると直にその氣になつてしまふせがあつてこまります。

お柳さん如何か、かうしてゐて見ると、ひとし

ほ奥さんの身の上が案じられます。一度さらお目に

かゝらぬのに、直に臺所へいつて、大根づけ切つて、さつそくにしてくれたあの働きぶりを、今更のやうにおもひうかべます。人は、何邊も行合ふ必要はないものです。

先生の御文章は、すんなりと丸味があつて、そのくせ恐ろしい處がある。

○

その三月の初であつた。私たち夫婦は生家の村で結婚披露をする事になつた。村へかへつてきて見ると、披露のために五百圓から七百圓、ごく儉約でも三百圓はかゝるといふ。私はふるへあがつた食つてゆくさへハツトの事で、おまけに父の借金を背負つてゐる身が、どこ

からそんな大金を得られよう！一體どうしてそんなに要るのか？近所の家はそんなに金があるのだからか？段々きくと、たゞ競争でハデな御馳走をするためにその借金が一代ぬけないといふ。そこで何とか改善しようとか村で申合せた所だつたが、その改善といふのが、何でもいきなり手輕にして金をかけないといふ主旨だから、きめるそばから破れてゆく。たゞ手輕といふ事では人間の氣がすまないから守れないのだ。どうか手輕でしかも要領を得た改善法を工夫したいものだ。

思ひあまつて、私は小林先生をたづねし、

「先生のおつしやる通りのやりで結婚披露をしたいと思ひますが、本来のやり方を教えていただけませんか。」

と御願ひした。先生はデロリと私の顔を見て、

「おれのおつしやる通りにして、金がヨケイかゝつてもいいか？」

といふするどい一言だ。貧しいための改善ならば、金のある人はすぐ破り、景氣がなほればみんな破る。第一、經濟から來たのでは、信仰行事の復活にはならない。先生は私のフラ／＼を見ぬいて、清い決心をつけさせるために、ツケンと釘を打ちこんだのである。私はハツと氣がついて、全身汗ばみながら、

「金はどんなにかゝつても、本當のやり方をしたいと思ひます。」

先生はニッコリなされて、

「ようし、それなら話さう。だがナ、披露といふ事が、結婚した家だけの仕事になつたのは、つい戰國時代以後のことだ、それがそもそも間違ひの元だ。或る家が村人に對して、ウント御馳走をして、ゼヒよろしくたのむといつてたのみ入るのをかしい。それどころか、その家で氏子を一人ふやして氏神様の發展に貢献したのだから、むしろ手がらの方である。さればといつて、こんなに御馳走するからおれのいふ事をきくと威張るのも、大へん心得ちがひだ。今、ヤセがまんて借金してまでへんな事をするのは、この二のつ心持がゴツチヤになつて、見榮を張りあふからだ。」

本來はなほらひの祭といつて、氏子がふへて氏神様が發展したのを、氏子全體がよろこんで、お宮へ集つて、大いに祝つて、無禮講でくつろぎたのしむ行事なのだ。一軒の家の仕事ではなくて、氏子全體の仕事なんだ。だからオメエにばか話してもダメだ。村中の人にわかつてもらはなくてはならぬやれんよ。」

私はおもはず

「それちやア先生、村中の衆に寄つてむらふで、ゼヒ

その話をきかしておくんはずつて。」

と、弱い先生をまた引張り出すことになつてしまつた。

「よし／＼、きつと行く。男も女も、年寄も若い衆もみんな寄つてむらふがいい。」

かくて、或る日の午後、村中の老若男女が集つた所で、先生に御話願つた。先生は、昔からの結婚風俗と信仰とをくはしく述べられて、

「披露の仕方は、新婚の家で氏神様へ御酒をあげ、氏子はめい／＼手作りの野菜を煮たり漬物を出したりして、重箱かなんぞにつめて持ち寄り、女衆仲間は薪を持ちよつておかんをつける。そこで氏の頭——今なら區長さんがまづ、おめでたうございませと祝ひ、氏子一同ついで、おめでたうございませと祝つて、その御神酒をいただき、そのおかげをつゝきあひ、お家の芋は大へんおいしいがどうやつておつくりですね、といふ風に、自然に農事研究もしながら、共に飲み、共に食べ、共にうたひ、共におどつて、氏神様の萬々歳を祝ふのです。」

とお説き下さつた。そのあとで村の衆に相談をかけたところ、

「どうも一軒々々で何かこしらへるのは面倒だ、當番のやうな意味で、婚禮のあつた家でやつてもらひた

い。その他はスツカリ御話の通りになりたい。」

といふ事になつた。そこで私は、波多でつくつた野菜を一車ひいて來て、ドツサリ煮て、御酒一斗ばかりと共に、お宮へ持つて行つた。人々は社務所へ集つた。女衆はキロリでおかんをつけた。そして、區長の發聲でおめでたうを言つて、さかもりに入つた。僕たち夫婦はとりもちをした。一同は心ゆくまで飲んで食べて歌つて踊つた。

あとで村人の語るをきけば、

「何だかバカにセイ／＼して、トテモよかつた。」

とのことであつた。もし村人がもう一枚皮をぬいで、めい／＼の手製のおかづを持ちよつたら、一層よかつたらう、と言ふ人もあつた。とにかく、金もほとんどかゝらずに、しかも心ゆたかな信仰的な披露が出來たことは、ひとへに小林先生のおかげであつた。

昭和四年の春、瑞穂精舎へいよ／＼舎生を入れることになつたので、先生に御來講を御願ひしたところ、月に一回お出で下さるといふ御返事であつた。私はガツカリした。もと／＼精舎を開いたのは、私自身に力があつての事ではなくて、私の師匠たちをよんで來て私も舎生共々に教を乞はんがためであつた。いなむしろ、舎生をグシにつかつて、私自身が先生の學問を奪ひとるためであ

つた。月一回ではなさない。そこでサツソク手紙を以て

「ゼヒ四回、少くとも二三回」

とダダをこねたのである。その御返事には、墨くろくと、

いきます、命がけでいきます。

何事にもいたましいほどの

君の本氣な魂の前でものをいふのは

小生終生の奉捨と感ずる、

一ヶ月二回いきます。

あゝ、バカな私は、先生が岡田の學校へ通ふみちさへ車につて、やつとつとめてをられる御病氣も察せず、むりやりに御願ひ申して、ホントに「命がけ」をさしてしまつた。今、この御手紙の前で、いくら泣いてもとりかへしがつかね。

○ 原稿は今酒井君の手許でこしらへてゐてくれます。

今月末には間にあひます。それをもつてはなしに行きます。

原稿といふのは、講本のこと、萬葉集と古事記から歌をぬき出し、祝詞宣命とあはせたもので、それを持つた酒井さんと堀内さんと今井さんとおつきして、先生

「このころはお厄介でした。あのあくる日からびつたりと風引いて寝てしまひ、配井君も、今日で七日間ねてしまひ、萬事手ちがひを來たしてしまひました。土曜の話は少しのばして下さいませ。」

x x x  
廿五日の土曜日の午前十時から、高等女學校に、柳田國男先生の話があります。おきくに、舎生の諸君をおつれなされては如何か。きつとよい話をせられる事とおもひます。私はずとも起きられそうもありません。

先生が精舎へおいで下さるには、四五日前から、毎晩おそくまで、部屋中へ本をひろげちらかして、机の前に坐りこんで、眼をすゑ思ひをこらして、用意をされた。そして、精舎から歸られると、きまつて二三日から五六日ねこまれた。

これは後に奥さんからおきくしたことである。今となれば、何事もたゞ涙である。

○ 六月はついお見えがなかつたので、察しのわるい私はまたサイソクした。その返事。

いきます。六日にいきます。

みなさまによく申上げておいて下さい。

奥さんを大切にして下さい。

小林先生の思ひ出

はしづかにおいでになされた。

例のとほり、先生は萬事がものしづかで、私どもに對しても舎生に對しても、まことにねんごろで、恐れ入るくらゐである。

ところが、一タン講義になると、全く神様がのりうつつて、仰ぐ眼もまばゆいほどである。萬葉集卷の一の國見の御歌を、半日がかりで話された。一字一字、一語一語、今までの學者の説とは打つてかはつて、ぬきさしのならぬ解き方で、しかもその味ひ方に至つては人間性のドン底の信仰生活に深くつき入つて、神ながらの世界を見せて下さる。今までの學者や歌人の味ひ方とは、全く世界がちがつてゐる。

學者としての先生のネウチは私などのはかれる所ではないがその學問とビツタリ一つになつた先生の魂の前に、ひれ伏さずにはゐられない。たゞ文學とか民俗學とかの立場から見るとは、先生の正體——神ながらの實體にふれることは出來ないのだ。

○ さてお話がすむと、例のやさしい先生で、にこやかに微笑みながら、講本の表紙に「飛鳥の山の井」と書き、その扉へ歌など書いて下さつた。

○ 二三日の後、(五月二十三日付)「病中小林謹一」として

午後参ります。この前の時間位にまゐります。

この時も萬葉の御話であつた。

○ 土曜日にいきます。

堀内君も一所にいきます。

x x x  
堀内君は「鎮魂」の話をするし、私は「ヤクモ立ッ出雲ヤヘガキ」の古事記の歌の話をする。七月十七日。

堀内さんは先生の御弟子である。

「堀内君に若いうちにウント勉強させたいで、精舎で話をさしてくれんか。」

といふことで、堀内さんにヒント(暗示)をあたへては勉強させるやうであつた。堀内さんは、ちようど禪宗坊さんが師匠から問題を與へられて工夫するやうに、苦心して、やはり夜の二時三時まで勉強しては、精舎へ來てくれた。先生が弟子を仕込まれるやり口は大方こんな風であつた。

○ たしか八月の初にお出で下さつた時、私は如からおともをして、松原の道にさしかゝつた。はるか向ふから一人の洋服きた人が來るのを見て、酒井さんが、

「精舎の生徒さんだね。」  
 といつたら、先生はすぐ、

「バカいつちやいけない。まるでちがふよ。」

段々近づいて見ると、今井さんであつた。

「そうれ見ろ！」

と先生に笑はれて、

「どうしておわかりでした。」

とおきよしたら、

「精舎の若い衆は歩き方がちがふよ。それ位のこと  
 分らなくちや困る。」

と言はれて、今井さんにも

「今井君だつたのかい——どほりて氣樂さうなカツコ  
 ウだと思つたよ。」

と言つて、お笑ひになつた。

○  
 その日は、お晝あとで、裏の川へ水あびに、先生につ  
 いて行き、ふんどしの上め方を教へていたといふた。先生  
 は和田へよると早く歸られたので、酒井さんにたのんで  
 野菜物か何かおあげした。その御返事、——

「ありがたう。酒井君へのお心づくし正に拜領いたし  
 ました。實にすみませんね。それに、うりをいたさ  
 ました。酒井君へも分配してさしあげました。今、和

田から一寸松本へかへりました。そして君のおうちの  
 様子を家内に話しました。家内もぜひ一度夏のうちに  
 参上させていたゞきたいと申して居ます。早くなほつ  
 て行きたいと申してをります。

○  
 奥さんお子さんお年より、大事においとひなさつて  
 下さい。

何かおあげした時に、先生ほど心から御禮をいふ人はな  
 い。あまり禮をいはれて、かへつてこつちが困つてしま  
 ふのが常であつた。謝禮に金を出すとどうしても取らな  
 かつた。ある時は、むりにあがりはなにおいて逃げて來  
 たら、

「どうしても苦になつて、眠れなくて困るから。」  
 といつて、人にたのんでかへしてよこされた。

○  
 八月二十九日、——

「今月は堀内君も小生も参上出來兼ねます。九月にな  
 つて骨折つて取りかへします。」

しかし、九月も色々でお見えがなかつた。その頃であつ  
 たか。

○  
 「心づく照れる月の面

松原の精舎の子らは

ねむりつらんか」

といふ御歌を下さつた。それは眞夜中にかかれたはがき  
 であつた。夜となく晝となく、私たちを見守つて抱いて  
 ゐて下さる御心が一同のはらわたにしみた。

○  
 十月二十七日付、

少しからだの具合がわるくて居ますから今月は参上  
 いたしかねます。何分よろしく願ひ上げます、みなさま  
 によろしくお傳へ願ひます。

この時はすぐ治られたが、今度は私の方が仕事に追はれ  
 出したので、その事を申上げたら、

「ありがたう。うんとはたらいで下さいませ。少しの  
 間遠慮申して参上いたさぬ事にいたします。堀内君も  
 同様です。むぎまきがすみ、少し仕事片附いたらお  
 知らせ下さいませ。みなさまによろしく、奥さんには  
 ことによろしく願ひます。」

十一月十五日付、

「もう、おしごと、いくらかかたつきましたか、堀内  
 君が参上したい様に申して居ります。私は、今、又、  
 風引いてだめです。少しの間ゆるして下さい。さつま  
 いも、ありがたう存じます。」

○  
 お弟子を大事に奥さんを大事に、お子さんを大事に  
 何分願ひます。」

小林先生の思ひ出

十七日付、

「小生またかぜひいてねてしまひ、堀内君も神経痛で  
 ねてしまふ、こゝしばらくごぶさたする、何分よろし  
 くおねがひ申上げる次第でございます。どうも冬にな  
 るといけません。」

○  
 皆様によろしく願ひ上げます、奥様にもよろしく。  
 貴兄御身御大切に、大勢の命をあづかつて居る御身  
 ことに御大事に願ひます。」

○  
 私はどうも無鐵砲で、人に對しても、自分に對しても  
 無理をさしていけない。それを先生はどれほど苦にされ  
 たか知れないのだ。これらの手紙をよみかへすにつけて  
 も、私はひどく叱られた事を書かずにはをれなくなつた。  
 それは、この年の春の事である。松本へおたづねして  
 いよく青年を入れる事になつたといふ話をして、おい  
 とましようとする時に、

「御苦勞だな。それちや大事にしてやつとくれ。」  
 としづかに言はれた。私は何心なく、

「ハイ。」

といつて、おじぎをした。その「ハイ」が浮いてゐたの  
 であらう、先生はツト立つて、私の頭を上からゴツンと  
 臺におしつけ、

「大事にしろよ。何事も大事にやれよ」といつて、なほもゴツ／＼おしつけて、

「いゝか。わかつたか。大事にしろよ——」先生の聲は涙にふるへた。私は全身汗ビツシヨリになつた。

さて十二月に入つても先生はねられたまゝであつた。「和田へもまたとりをいたゞき、松本へは又雑誌をいたゞき、相すみませぬ。わたしはまだいけません。こんどはちとながくやられました。」

奥様如何、お弱い御身體人事とはおもへませぬ。舍生諸君によくねがひます。昨夜は諸君のゆめを見ました。心弱くなつたせいでせうか。」

二月はとても話をする事は不可能とおもひます。堀内君も同様です。土曜日曜には必ず何かあつて、とてもいけません。二月及び三月の土曜日曜はびつたりとふさがつて居ます。小學校は冬になるといけません。こんな風で昭和五年には春から殆ど御講義を願ふことが出来なうだ。

あまりさびしいので、六月一日の休み日に舍生をつれて先生のお宅へおしかけることにし、その時御講義をと

と訴へた。先生はしづかに

「俺は坐禪をしたこともなし、さとりなんといふこともわからんが——」

といつて、やをら右手をあげながら、

「今こうして、お茶をいたゞいてゐる、——これだけのもんぢやねえかや。」

といつて、部屋の内を見まはして、

「迷ひとか悟りとか、人生がどうのかうのとか言ふけれど、別に何にもねえやうだ。」

といつて、ニツコリとお笑ひになつた。

先生の全身から神ながらの光明がさして、常世の春は部屋一ぱいに輝いた。先生はどうしてかうもスツキリとぬけ出られたものであらうか。

農休みにはゼヒ御來講をと御願ひして歸つたが、六月十日付、堀内さんの代筆で、

又風をひいて昨日から居る。十二日から二十一日まで農事休になつたが、この分では日取など出来ない。そちらから休の終の方で二日ばかり日をきめてもらひたい。數日なんてとても引受けられない。」との事であつたが、農休にはつい見えす、七月一日づけで、

お願申したところ、御返事に、

このころはたまごありがたう存じます。今またおはがき拜見いたしました。このころはどうも気がすぐれませぬ。お茶だけでおゆるし願ひ上げます。そのうちに掃土重來して、今までのづぼらを一時にとりかへしたう存じます。生徒の方々へ奥様へよろしく。

お茶だけでケツコウ、先生の魂にふれさへすればいゝのだから、とおもつて、一日にみんな御伺ひした。

「おゝよく來てくれた。」と立つて來られ、ニコヤカに舍生にも會釋され、

「みなさん、ようこそ。さうどうぞ廊下の方から。我々があがると、先生は机の前にユツタリと坐られて、お茶を入れて下さりながら、

「あなたはリツパな體格ですね。」

「お家はどちらです。」

などと、實にやさしい情愛のあふれたもてなしに、一同はちようど親鸞の羽がひにいだかれた雛つ子のやうになつて、おとなしくお茶をいたゞいた。世間はなしにまじへて、民俗學の事や大和民族の信仰の事百姓生活の事など話され、瑞穂精舎の修行の話になつて、坐禪の事につると、舍生はいづれも

「どうも見當がつかせません。」

ごぶさたして居てすみませぬ。どうしても身體がいけません。堀内君の分は間に合つて居ますから、同君に直接にいうて下さい。わたしはともだめです。何もかも皆お許しを願ひます。今は人目をさけて心靜かにひたすら靜養して居ります。

かう筆でかいた間に、ペンで小さく、

かうして居ても常に何物かを考へ何物かをおもひ、何物かをなしつゝ居ります。此點は一つ御安心を願ひます。心しづかに、ひたすら精進しつゝ居ります。人知れず物思ふ境遇はまた一入しみ／＼といたします。

三千年四千年の昔の見ぬ世の人をよび起して、しめやかに、かすかながらもその聲を耳をあてゝ聞いて居ります。見ぬ世の夢物語は、はかないものと誰が言へよう。

病魔とさしむかひで、常に力一ぱい精進なされた先生。そのはつりきつた魂の力が、古人の魂と相ふれて、新しい學問が生れ出るのだ。小林先生の學問が、殆ど折口信夫氏の研究を受けいれてゐながら、しかも小林先生ドクトク（ドクトク）の生々しい靈力をもつてゐるのは、けだしこの精進力で體得されたからであらう。形式ばかりの材料あつめを學問と心得てゐる人たちが小林先生のことを獨斷だといふのもかうした活學問を知らぬからではあるまいか。

ラジオの電波を合せると遠くの聲が聞えるやうに、先生は心をすまし切り張り切らせて、太古の人々の心臓のコードウまで聞取られたのである。

夏休に先生を引張らうとしたら、

目の前にうつむきさけるゆりの花

朝は涼しも露をしとどに

和田へ来て居ます。どこへも行く氣になりません。かうしてゐるが何よりです。

ミナサマニヨロシク オクサンニハ別シテモオイト  
ヒナサルヤウニ

十一月になつて、農村更生講習會の時、やつと精舎へおいで願ふことが出来た。午前午後にあつて、「杵子の話」をされた。あの御飯を守るシャモジによせて、大和民族のお神さんの道をお説き下さつた、恐ろしいお話であつた。

先生がおいでになる時は、しづかに坐られると、きまつて火鉢の火かげんを見、薬籠を持ちあげて見られる。

「お湯がさめさうで、炭をひとつ。」とか、

「火がもつたないで、水をさして来ておくんな。」とか、言はれることが度々であつた。

「小林先生はやさしいけれど、おつかないね。」と家内もよく恐入つてゐた。

毎年冬の初頃、人參ゴボウや甘藷、又は米俵などを車につけて、先生の所へ引いてゆくことは、精舎のうれしい行事であつた。ガリガリの町人共やナマイキな俵給取の爲に、汗の結晶を安く叩き買はれることはいかにも無念でたまらんが、先生方にあがつて頂けると思へば何より張合よく働けるので。

ところが、いつも困つたことは、小林先生があんまりカクくて、

「お前たちがサンザ苦勞してつくつた物をそんねにむらつちや、申しわけねえ。」

といつて、なか／＼受取つて下さらぬ事であつた。私はかまはずドンドンおろしておいてにけ歸るのが例であつた。

「困つたナ。困つたナ。お前、とんでつて、和合の野郎よんでこい！」

などと、うる／＼なさる聲をきながら、逃げる時に、私は一年中汗水たらした苦勞も一度にわすれ、ホントに

百姓としての生きガヒを感じて、

「來年こそ、もつといふ物を、もつと澤山つくつて來よう！」

と勇み立たずには居られぬのであつた。

あとで奥さんの語るをきけば、

「お歸りになつたあとで、ウチの人は勝手場にシャガミこんで、頂いた物をちつと眺めては、『これだけつくるにや、ヨウイぢやねえ。申譯ねえ。』といつて、いつまでも泣いてゐて、困りました。」

あゝ、先生のやうな方をこそ、ものゝあはれを知る人といふべきであらう。世の中の養ふ人と養はれる人とが、皆このやうに感謝し合ひ感ゲキ合つて働いたなら、まあどんなに仕合せであらう！

昭和六年元旦の御はがきには、

冬ごもり幾日をかゆにしたしめる

なき人をかぞへてとしの夜も更けぬ

正月そう／＼精舎では農村教育講習會をするとして、病床の先生を引張り出した。今にして思へば、ゾツとするやうな無理をさせたものである。その日は「たなばた祭の話」をして下さつた。ミツギの體験を語られる時など

はきく我等さへ身の毛のそば立つをおぼえた。

アイニク大雪になつて、お一人では心もとないので、舎生の磯部に停留所まで送らせた。それから二三日たつと、先生から小包とはがきが二枚とよいた。どちらも一月八日づけ、

このごろはありがたう御座いました。あの君に助けられて雪の道のあるく事が出来ました。九時半に家へつきました。何卒十分にお禮申上げて下さい。實にあんな目に逢はせ、ことに下駄まで持つてもらひ、どうしても忘れられませぬ。こんな、いゝ人、ことに若い人にお目にかゝるのみでなく、その若い人の手で、この身をかゝへられて、しづかに、すなほに、送つていただいた事は終生忘れられませぬ。十分にお禮申上げて下さい。

同時に、すべてが君の感化だ、えらい事だ。君がこの青年にあらはれたのだ。いい。

次に、あの話の後の座談の時、いろ／＼教へてもらつた學問上の材料を持つて來る事を忘れてしまつたが、君からせひ、願ひして、書いてもらつて送つてくれ給へ。場所と、教へてくれた人の名前と、その時の使用物の名前と、形と、いろ／＼と何でもよろしいから教へてもらつて、又御恩がへしをいたしたい。何分御



願ひ申上げます。

これが一枚。磯部がお送りした時に、停留所で電車を待つてゐる間中、「ありがたう〜」を何十べんもくりかへされて、實に恐れ入り、生れて初めて人間眞情の流露にふれ、ホントの人生を知つたと磯部が感動しきつてゐた位なのに、まだ禮が言ひ足りなんだと見えて、こんなはがきを下さつたのである。

尙、後の方の學問の材料については、私が書いて書いておいたが、その紙をなくしてしまつて、先生にあげられなかつた。これは今でも氣にかゝつてならない。もし讀者の中に、あの講習に出られた方があつたら、ぜひ私に、あの時の話を書き送つて下さい。先生は亡くなられても、學問は私たちがうけついで、益々進歩させて、先生に御恩がへしをしたいものです。

さてもう一枚のはがきは、小包にして下さつた先生の筆蹟についての御あいさつで、

これ、倉島のお姫さんと、雪の道を送つてくれたあのお若い方とにさしあげて下さい。不出來ですが、そこはおゆるし願つて、たゞ雪の道を送つていたといふ記念だといふことで、どうぞもらつていたゞきたう存じます。倉島さんは、此の前に一度お目にかゝり、又ひよつくりとお目にかゝり、一寸へんな氣がしまし

た。これが前世の因縁かと、はつと思ひました。最後に、くれ〜と申上げねばならぬ事は、お柳さんを大事に、お子さんのうまれるまでは禁慾して一指もふれぬ様に、ふれ〜ばばちがあたる、大事に大切に。

講習生諸君に、何分よろしく願ひ上げます。言葉ではどうもお禮がいひきれなんだと見えて、半切にリツパな御歌を書いて下さつたのである。あまり出来がよいので、私が一枚もらつてしまつた。それが「百姓」誌へ寫眞に出した「枯野原」の歌である。

倉島のお姫さんは、その後學校づとめをやめて、一心に百姓を習ひ、今では手つむぎから草木染やら手織までスツカリ覚えてリツパな「たなばた姫」になつてゐる。まことにフシギな因縁である。

最後の私への御注意、——あゝ、こんな大事な心得、しかも産みの親さへはどかるほどの立ち入つたいましめを垂れて下さるのは、廣い世界に師匠の外にないのだ。神の子の宿つた聖靈の宮を汚さぬこと、——これこそ人類完成社會淨化の第一歩だといふのに、なか〜守りきれなくて困つてゐた私にとつて、先生の御言葉は實に力強い護符であつた。

昭和六年には、不景氣が益々ひどくなり、舊い日本は

全く行きづまつて新しい時代がひそやかに芽ぐみ初めた雑誌百姓が小さい双葉をもたげたのも、この年の二月であつた。

先生は私たちのクツテの願ひを容れて、ほとんど毎月「農民雑話」を御書き下さることになつた。奥深い學問が、先生の信仰生活をとほして、あの靈妙な御文章になり、切々としてせまる時、我等の魂はどんなにふるひ立つたことか！ 遠い先祖から傳はつてゐた神ながらの百姓心が如何にムク〜よみがへつたことだらう！

しかし先生の御健康は、どうもすぐれず、學校を休まれる日が多かつた。二月二十三日、先生のつとめてをられる岡田學校へ講演に行つた時も、先生はお見えがなく磯川さんに托して御手紙を下さつた。

このごろはたまごありがたく奉存候、御安産の由何よりのことに有之候。名は何とつけ候や、うかゞひ度候。小生まだ起きられず臥床いたし居候。其うちに彼岸でも來たらもぞ〜いたし得る事と考へ居候。

此度また道の爲め御精進御苦勞千萬の御事と深く感銘いたし居候。何分よろしく、小生のつとめて居る村に有之候。何なりと一つ御骨折下され度候。

奥様お子様お身お大事に願上候。あまり話ばかりい

小林先生の思ひ出

たし居られ候て、家庭をるすいたす事は、奥さんにとつてさむしき事と推察奉り候。外出は餘儀なき事としても、必ず寢泊りは波多のお家にてなさるべく候。小生日毎に來客にてこまり居候。ひたすら人をさけて心しづかにとおもひ居候も、うき世のこと一つも心のま〜には相成り不申候。

よかれあしかれ學校は三月かきりにてやめ申すべく候。さすれば餘命は無條件に兄にさし上げ申すべく候。小生の餘命をして兄の手足となし下され候はば、この上なき幸とおもひ居候。

日ごとにいやな天氣つゞき、御身おいとひなされ度この事のみ心願のいたりに有之候。今夜ももう十時、鐵瓶の湯のみたぎり居候。番茶をのみてこれよりいねんかとおもひ居候。先はこれにて。

冴えかへる夜や

つつびんの湯のたぎり

今となれば、あまりにせつない御手紙である。雑誌になぞ出すのがいやになつてしまふが書き出した義理で仕方がない。私はその頃毎日毎晩講演ばかりし歩いてゐてお産の時もルスであつた。先生はたえず弱い家内のことや子どものことをお案じ下さり、私の體のいたむことをお案じ下さつてゐた。あとで奥さんからおき〜すれば、

「どうかして、あいつに講演をやめさせたい——」  
 といつて泣かれたことが幾度もありだつたといふ。先生の涙は私にばかりでなく、どんな人にもそよがれたのである。だから、先生のお家には來客の絶間がなかつた。しかもその一人一人に對して「餘命は無條件に兄にさげ申すべく候」といふ調子で、何から何まで心をくばるのだから、壽命もちどまるわけである。

あの日であつたか、歸りに同心町へおよりして、  
 「今度の子は瑞穂精舎で生れたから、瑞穂とつけました。」  
 と申上げたら、

「お、そりやよかつた、俺も瑞穂がいとと思つた。よかつた、よかつた。」

と大よろこびであつた。お茶をいただいてヨモヤマ話をしてゐるうちに、じつと私の顔を見まもられて、

「どうもいけねえ——去年あたりのやうなツヤがなくなつたぞ。俺が弱いで、オメたちは是非丈夫でやつてむらひてえに、今井君も病んだし、酒井君も弱いて、——みんなダメだ、いくら言つてもチツトモわからねえ……」

先生は涙をバラ／＼こぼし、お茶をガブ／＼のんで、身をもたえなされた。なほ語をつがれて、

「冬は草木でも人間でも休むべき時だ。夏の無理はそれほどでねえが、冬の無理はこたへるもんだ。講演をやめるわけにはいかんなア。」  
 としみ／＼クドかれた。

これはもつと前のことだが、先生に泣いて髪をひつつかんで叱られたことを、思ひきつて書かうかしら。——いや、これだけは、なんびとにも打ちあけてはならぬ。亡き父の親心と、亡き先生の親心とを、同時によびおこさせるあの事だけは、いつまでもナマ／＼と私一人の胸深くだきしめて行くことを、御ゆるし願ひたい。

○ 學校をおひきになつた先生は、しづかに讀んだり書いたり、來る人たちの世話をしたりしてをられた。もつたいないので、師範か高等學校へでも少しつとめて頂きたいと思つたが、浮世の官僚學校では資格のない先生を起用することが出来なかつた。

その代り「百姓」誌の讀者たちは天下の小林先生を獨占する光榮に浴したのである。先生は學問の上では折口信夫氏の指導を受けて居られたやうだが、すべての知識を、自分の生活でこなして、先生自身の血となし肉となし、更においしい乳にして、我等に授けて下さつたのだ

それを我等の口もとへ持つて來てのませるまでの御苦心は、なみ大テイではなかつたと見える。幾日も頭の中でねつてねりぬいて、いよ／＼氣合のかゝつた時、ペンをとられる。書き出せば、夜でも晝でもブツ通しにどんどん書かれる。夜半や夜明けに書き終へた原稿が多かつた。そしてペンを投げ出すと、そのまゝグツタリ床について

○ 數日は頭のがらないことが例であつた。一ヶ月の原稿で一ヶ月ぐらいつつ壽命がちどまつたらうと、今になれば何とも申譯なくて、身のおきどころがない。

○ バカな私は、それでも足らずに、松本の青柳さんたちと一しよになつて、萬葉集の講義を御願ひした。七月十八日の夜であつた。伊勢町の六三銀行前で車からお下りになつて、しばらく息をおつきになつて、肩につかまつて、しづ／＼階上にのぼられた息をやすめなされた。

あまり苦しさを、私たちは心配になつた。けれども先生は話すといつて、お起ちになつた。萬葉集に現はれたる兩性の信仰」といふ題目で、歌を二つほど刷つて下さつた。まづ卷之一の初めの、雄略天皇の御歌を、聲ほがらかに誦まれた。その刹那から、先生は先生でなくなつてしまつた。凛々として神威かゞやく雄略大帝そのまゝになられて、神代このかた傳來の信仰生活をまのあた

り我等に示して下さつた。我等の内に眠つてゐた久遠の信仰がポツ然と眼ざめて、満堂さながら高天の原となりちはやふる神のみ魂がウナリを生じてほとばしつた。うつせみの二時間が、知らぬ間に過ぎて、

○ 「今夜はこれで御免かうむります。」  
 と、ニツコリ會釋なされた時、先生は元のやさしい弱々しい先生にかへられて、全身あぶら汗をかき、苦しげに息づきなさる痛々しさ。

○ 私たちはあはて、打ちよつて按摩しながら、どうして此の御病身から、あんな凛々とした聲が出るか、あんな力強い字が書けるか、つく／＼不思議に思ひ、神ながらの信仰の光にたゞ手が合さるのであつた。

○ その後ドツとねこまれて三十日にはこんな端書を下さつた。

書きもの正にいたゞきました。小生いきがきれて身うごきが出来なくなり、何もかもうちすてゝ居ります。せんとへもいきません。一寸朝がほの鉢を持つてもいきがきれます。醫者はもう絶對安靜を要するといひました。しかしふしぎに飯をうまく食へます。これが何よりのたよりです。こゝしばらくごぶさたします。達者になつてからお目にかゝります。

普及社の人に来て、雑誌「平和」へ是非貴兄の一文をいたゞき度い旨申しました。何か一つ短くてよいから書いて進めて下さいませ。波多へお願ひに参上するといつていました。何分よろしくお願ひいたします。奥さんへよろしく、お子さん大切に願ひます。これは、八月の短期講習に御來講のことをお願ひした時の御返事であつたと思ふ。私もあまり御無理願つてはいけないと思つてあきらめてゐた。

ところが、八月十二日、講習も終の日の朝、一同庭にならんで皇國運動をし、君が代を歌ひ出した時、あはたゞしく自動車に着いて、二三人おりて來た。私たちは見むきもせずに君が代を歌ひ、つゞいてすめらみことの彌榮を力の限り叫んだ。

をはつて見ると、小林先生がおいで下さつたのであつたゆつたりと坐つてをられた先生は、私の顔を見るなり「アレでいゝ、聲にあつかがあるでナ——」といつて、酒井さんの方を向いて、お笑ひになつた。實に氣味の悪いことを言ふ先生だ。

さてその日の御話は、さゞれ石のいはほになつた話から我等の先祖が一人前の男になるための修行——山籠りの信仰行事に關するお話まで進んだ。そしてこれが日本

文學史の序論だといはれた。

我が大和民族を今日まで持ちこたへ發展させて來た力は、實にこの山籠りの教育から生れたのだ、動物としての個人から生れかはつて、氏神そのまゝになつて村の自治をかため、田の神そのまゝになつて耕したればこそ、瑞穂の國は彌榮に榮えて來たのだ。今後の興廢もまた此の惟神教育の如何によるのみ。

あゝ、これが小林先生の今生で最後の御話になつた。實に先生こそ神ながらの教育者であつた。そして精舎の山籠りに於て多くの教育家たちに惟神教育の生命をつぎこまれて、此の世の遺言となされたのである。

歸りには、自動車はいやだといふので、荷車に布團をしいて乗つて頂き、舎生の山口が停留所までにお送りした。

「これはいゝ。どうも有難う。申譯ない。」と大へんよろこんで、お歸りなさる御姿を拜して、その昔孔子が諸國をさまよはされた有様を思ひ浮べるのであつた。

それから間もなく、日本農民協會が出來、九月の縣會選舉に私が立つことになつた。十五六日の頃、先生の所へ行つて、

「どうしても百姓の向ふべき道を叫びたいからやりま

す。」

といつたら、

「バカめ！ そんなことしちやいけない。」

と大へんおとめになつた。私は、

「いけなくても何でも、必要だからやります。」

といひ捨て、サツサとび出してしまつた。

先生は、バカな奴だといつて、とても怒られたさうである。しかし、どう思ひ直されたのか、その夜、左の御手紙をしたためた。恐ろしい力のこもつた大きな字で

啓

老骨感激にたへず、死出の思出今生の名残、身命をさ

ゝげて骨折らん、あゝ

みづ／＼しくめの若子はたちけり

なみだぐましもみのかさをきて

老歸雲

九月十六日

あんなに強くとめて、おいていよ／＼やるとなれば、こんな力を入れて下さる。きけば、わざ／＼和田村へ行かれて、杖にすがつて何か言ひ歩かれたさうである。そのせいでか何だかあの村の得票は二百數十に達した。その後、ある日、鈴澤先生がおいでになつた時、選舉

小林先生の思ひ出

の語が出る、先生はいきなり鈴澤先生の腕をシツカと握り、

「先生！よかつた、よかつた！あれだけの點を得て、しかも落ちたから、トモよかつた！ね、先生！」

といつて、涙をボロ／＼こぼされた。あとで鈴澤先生がその時のことを語られて、

「小林先生は弱いやうだが、魂だけで生きてゐるせいか、フシギな力を持つてをられる。あの時つかまれた所が、二三日痛みましたよ。」

あゝ、このハツラツたる天眞の流露！しかも一點の私情なくまた淺薄な感傷にあらず、ひたすら世のため道のため、迷り出る大丈夫の涙！そこに我等は、ちはやぶる神のみいづをうち仰ぐばかりである。

十一月九日付、和田のお家からののがきも、先生の眞情が面白く出てゐる。

君、甚ダスマヌガ、ヤギヲ一匹飼ツテクレタマヘ。ソレハ、今和田ノ家ニ居ル奴デ、女ヤギデ、モウ一人前ニナツテキル。老母ハ、モウ骨ガ折レテ飼ヒキレナイト云フ。君ゼヒ、モラツテクレタマヘ。

老母モ、和合先生ノトコロヘクレテヤリタイ。大ゼイデ飼ツテモラヘルカラヨイ、ト申シテキル。ゼヒ一

三九

ツ、イヤデモ飼ツテクレタマへ、人ナツコイ、イヤ  
ツデアル。ゼヒ一ツツツレテイツテクレタマへ。荷車ヲ  
曳イテキテツレテイツテクレタマへ。カゴカナンカ入  
レモノヲモツテ車ヲ引イテ來テクレタマへ。ムリデス  
マンガ外ニタノム人がナイ。君ノトコロデ何デモカン  
デモ、モラツツツレテイツテクレタマへ。老母トヤ  
ギトヲ助ケテクレタマへ。小生和田へ來て紅葉におど  
ろいて居る。栗の落葉で家も庭も埋もれてゐる今年の  
秋を我家へ歸つて初めて見た。原稿おくれてすまぬ、  
このごろは息切がことにひどく、それで和田でねて居  
る。

生きとし生ける物みなを慈愛のふところにいだかれた御  
心が切々とせまる。先生の眞面目がまる出しにおどつて  
ゐる。後の世までも傳はつて、人類の名譽を輝かすべき  
妙文の一つではあるまいか。

十一月二十三日は新嘗祭とて、お祝の餅をついた。お  
いで下さつた鈴澤先生が、小林先生の所へ手づからお届  
け下さつた。その御返事、――

お祝のおもちありがたう。鈴澤先生に持つて來てい  
ただきからだもんでいたゞき、忝なき事であつた。先  
生にお目にかゝると天の人に行合つた様な氣がする。

農民雑話のぬきすりを拵へて呉れるといふ、私とし  
ては、一生一代の面目で、夢にも思はなかつた事であ  
ります。實に難有い事であります。巻末に、左の數言  
を加へて下さい。

猶ほ、君が何か書き添へてくれるといふし、鈴澤老師  
が更に書き添へて下さるといふ、この二つの事聞いた  
時、何といふ仕合せの身の上かとその夜一晚中考へて  
ねむれなかつた。實にすまぬ。命のあるうちにいゝ人  
と道づれになつた事を忘れてはならぬと思ふてゐる。  
その數言といふのは、印刷所へとどけたところ、既に製  
本屋へまはつてゐて、間に合はなかつた。そのまゝどこ  
かへなくなつたしまつたが、割合にハツキリ頭にのこつ  
てゐる。

## 追記

私には此の世にたつた一人の師匠がある。學問の上  
のみでなく、私といふ者のすべてを師匠はじつと見ま  
もつてゐて下さる。

農民雑話の拙稿は、この師匠から口うつしに授けら  
れた所を私のいたらぬ心で味ひ、つたない筆でつゞつ  
たものゆゑ、尊い教をかへつてきづつたことと畏れ  
てゐる。しかし師匠は此の罪をさへ黙つてお赦し下さ  
るであらう。

小林先生の思ひ出

貴兄よりも宜敷申上げ下されたい。雑誌も舎生の諸君  
よりいたゞきました。宜敷申してくれ給へ。小生あの  
後幾度も發作が起り、鈴澤先生の來てくれを前日は、  
醫師からのかへりに人力車の上にてやられて動けず、  
道の真中で醫師を迎へて手當してもらひやつと家へ來  
た。今は絶對安靜、しやべる事全く中止、誰にも行合  
はぬ。東京から先生が來てくれたが、矢張話もろくに  
出來ず、出版豫約の本も、廣告のみにて一ヶ年を経た  
先生はこの事についてやく／＼來て呉れたが、張合わ  
る／＼かへつてくれた。

奥さんにはことよろしくやぎを早くもらつてくれ  
給へ。

先生とは、折口先生のことである。折口先生は小林先生  
を學界にあらはす御希望らしく、小林先生もその氣にな  
つてをられたやうだが、つひに果せなかつた。

山羊は小屋をつくつてからとグズ／＼してゐたので、  
矢の催促をなさつたのである。

この一年にわたつて百姓誌におよせ下さつた農民雑話  
を、まとめてくれといふ大方の熱望によつて、十二月印  
刷にとりかゝつた。その印刷の上つた頃、先生から左の  
御手紙を頂いた。

師匠の名は折口信夫と申上げる。

何とつゝまじやかな、奥ゆかしい御心であらう！それだ  
のに、私が至らぬために、此の大切な御言葉をのせそこ  
なつて、先生の學者的良心をきづつけ、世の人々に對し  
ても先生の御心事を明かにし得なかつたことは、何とも  
相すまぬことであつた。こゝに謹んで、世間に對した  
先生在天の靈に對して、深くおわび申す次第である。

尤も、學者の繩ばりめいたことは、私は大きらひだし  
知りわけの氣にもなれない。道の世界には個人の名など  
皆たゞきつぶすがいゝ、たゞ學問が學問としてのびさへ  
すればよいのである。しかしそれ／＼の學者にはそれぞ  
れの持ち前があり使命がある。たとへば、柳田國男先生  
は日本に於ける民俗學の草分けをされた方で、極めて自  
由に手びろく材料をあつめ、且その取扱ひ方を確立なさ  
れた。だから間口がひろくて奥行が足らんといつて責め  
るのは無理な話である。そこで柳田さんや三矢さんの研  
究を發足點としたらしい折口先生が、更に一步進めて急  
所を深くつゞこみ、古代研究を通して大和民族の内面生  
活の輪廓をグ／＼明かにしてをられると思ふ。わが小  
林先生は折口先生の研究をいたゞいて、更にその中の核  
心をさぐり、古今をぶつ貫いてゐる大和民族の生活論理  
を追求し、それを自分の體驗からつかみ出された。氣が

つかずにお互ひが信じて行つてゐる事實の中から、それをハツキリつかみ出し、それを我々にツケンと指し示されたのである。だから先生に接してゆくと、今と神代と少しも變らぬ人間性のドン底の眞實をさとり、神ながらの信仰生活がいつしか復活するのである。

普通の學者のやうに、材料を外からばかり扱ふかばかりに、先生は内からその生命をつかまれた。だから、普通の學者の斷定し得ないことが、先生に於てはハツキリ斷定されてゐる場合も少くない。そこがわからずに先生を以て獨斷的だと批評する人は、自分の生活力が足らず、頭でばかりさばかうとしてゐる者で、東洋流の學究方法を知らないのである。

先生の文章も、したがつて、普通の學者から見ればヘンなものにちがひない。しかしそれは學問の流儀がちがふだけで、非科學的なものではない。又、我々百姓のためにお書き下さつたものは、學問を信仰にまで進め、生活にまでこなし、直ちに我等の魂をゆすりさますための文であつて、實際フシギな効力をあらはしてゐる。だから、學問の知識としては折口先生の御研究をソツクリうけたものとしても、小林先生の使命と價値とは全く獨尊のものなのである。殊に我等は物知りになりたいのではなくて、學問を信仰として生活に打込みたいのだから

どうしても先生のいぶきにふれる必要がある。先生にふれると、魂とか神とか國體とか百姓の道とかいふものが實にハツキリわかるのである。

○  
あの年の暮であつたか、昭和七年の正月であつたか、先生の奥さんが手縫のハンテンを家内に下さつた。ある晩おうかゞひして、

「家内も大よろこびで、着るのがもつたいないといつてゐます。」

と御禮を言ひ、按摩をしながら、いろ／＼きゝたいことをおきゝした。大きな疑問がズン／＼とけて、私は覺えず踊りあがつた。その時のおたより、――

今夜は、ゆくりなく君に行き合つてよかつた。お柳さんによろこんでいたといひ、とても小生等夫婦はうれしい。自分の縁の様な氣がすると家内は目に涙ためて小生に、いゝ人だね、といひ、どんなにでもそばに居つたらまつてやり度い、といひ居る。年齢の差でもあるのか知らんと思ふ。小生も君に會つて實に今夜こそ異様の感じがして居る。何を一口いつても張合がよい。病骨にとつてこんな張合のよい事はない。實をいふと、小生は師匠ぶつて、いさゝか若い人に話をして聞かせて居るが、一人でも感激をもつて聞いて

くれない。誠に張合のわるい氣がして居る。勿論小生もわるいだらう。しかし小生は一度手なづけた弟子はどうしても捨てられない。それが小生の性質かも知れぬ。しかしながら實をいふと、弟子でない友人の君一人が、話をする小生以上に感激をもつてくれるのは言葉に言へぬほど張合がよい。小生は今迄の弟子は皆捨てゝも惜しくない。小生今夜ほど確信を得た事はなない。君を通じて世の中へ出たい。小生にはもう出られない。百人に話すよりは、君一人に話す方がよい。實に張合がよい。

お柳さん何の心配なくきてください。あたたかくきてください。

一月二十二日十一時半 茶をのみつゝ

イヤに人をおだてたものだ。ヨソ見ばかりして忙しがつてゐる私に、どうかして落付いて勉強させたいといふ腹であつたにちがひない。ところが私は學問が大きらひで、たゞ働いて食つて行きたいといふ慾しかないのだから、先生はよほどジレツたかつたものと見える。今となれば、ナゼもつと勉強して先生の學問を奪ひとつてしまはなかつたかと師の心弟子知らずの歎きにたへない。

○  
一月の終瑞穂精舎の修了式に、御病氣でおいで願へぬ

小林先生の思ひ出

代りに、何か書いて下さいといひつて紙をお届けしたところ、先生は舍生と私と家内とに一枚づつ歌を書いて下さつた。

きけば、何枚目だか知らないが、紙に向つて、筆をもち、ジーツと心をすまし魂をこらして、靈感の來るを待ち、サツと筆をふるひかゝる刹那、グン／＼ヤリ前につんのめつて、しばらく氣を失つてをられた。奥さんが墨のよごれをふいてゐる間、先生はしづかに眼をつむつて氣をしづめられ、それからつづいて書かれたといふ。大きな字では之が絶筆となつてしまつた。

その時そへて下さつた御はがき――これも私の頂いた最後のおたより――はかうである。

字が落ちて居つたり、氣分につれたのだ。

字が落ちて居つたり、まちがつて居たりしたらいふてくれ給へ、書きなほす。このごろは朝から晩まで人様が来ていぢめるのでよみかへすひまなくだめだ。

○  
お若い人達には老人じみた私の歌など感激がもつてもらへまい。書いて無意味だ。何の爲めに書くのかわけがわからぬ。ゆく水のようにうかぶうかたの人のなげきは、はかなきものを「について、或人は老人じみた感傷だといつた。この歌「水泡の」までが序歌即ち流れる水のように浮遊して居る如き人間同志

のあつまりは水泡すゐたうの如きものだ、そんな人間同志のなげきはかない、あるかないか物の数に入らぬ嘆だ、聖者一人の嘆には及ばぬとの意であるつもりだ。勿論自分もうたかたの如き人間の一人として客観したのだめそ／＼して居ると言はれるのは言葉をとく力がないからだ。……は、はかなきものを、に氣をつけてくれ。キニ入ラヌ歌ガアツタラハネノコシテグレ給へ。人間界に並いたり笑つたりしながら、人間以上の滅びぬみたまをよびつゞけられる先生であつた。

二月になつて、松本高等学校の成人講座に、私が講義をひきうけて「大和民族の生活論」といふ題目をかきつけたのは、こんな折に先生の御教をドツサリ受けたいと思つたからだ。「先生の代りに話すんだから」といつて、二晩泊りこんで、さしむかひでお話をきいた。職人の山籠りや御柱の話に一番心を打たれた。炬燵に起きなほつて、ねんごろに口うつしに話された、あのニコヤカな御姿が、今でも眼にうかぶ。

そのあとでお茶のみながら、大へんフンガイして、こんなことを言はれた、――  
「このごろは毎日学校関係の人たちが来て、口々に學校費をへらされ俸給寄附をせまられて困ると訴へる。」

そのフガヒなさが癪しやくにさはつたから、今日はいつてやつたよ――校舎がこはれたら野天でも農家の軒下でもいゝ、俸給は全額寄附して、教育に力をこめ、體がフラ／＼したら、あゝ腹がへつた！といへば、必ず何處からか御飯が出て来る。着物がなくてふるへたらあゝ寒い！と言つて見ろ、必ず着物が降つて来る。――身を投げ出せば、世の中は面白いもんサ。」

先生こそ、教育者の教育者だつた。それだけに多少ケム、つたがられもしたが、心ある教育者は此の語を信じて眞の教権を確立するに努めるだらう。また心ある百姓たちは此の教が我等のために垂れられたことをさとして、眞の農道をふみしめるだらう。

○ その後は、スツカリ弱られて、話したいことも話せず聞きたいことも聞けなかつた。

○ 三月の或る日、新聞で折口先生が博士になられたことを知つて、

「あゝよかつた。論文を出されてから三年にもなるで、日本には読み得る人がゐないかと思つたに、マアよかつた。」

○ 新聞紙をつかんで大聲あげてよろこばれた。

その後のことは、堀内さんが書いたから、略すことにする。

日におもる病床にあつて、  
「何とかして、もう一べんよくなつて、五年はたらしきたい。」

といつて、食べたい物もたべず、一切の苦痛をしのいで、力一ぱい病と戦つてゐられた。按摩などしてゐると、

「野良も忙しいづらに、みんなの御世話になるばかりで、申譯ねえなア。――どうも俺は、なほれ得ねかなア――」

と、向ふをむいて、涙ぐまれ、また氣をとり直しては、口をキリツとむすんで、病魔に立ち向はれるのであつた。しかし精根つひにつきて、昭和七年五月三日の朝七時半、こらへにこらへた血のかたまりを、ドツと吐き出し、

「申し譯ねえ！」

の一語と共に、此の世の責任をきれいなサツパリと解除され、安らかに永眠された。感謝と齋慎さいしんと精進の一生が、最期の一息に送り出た此の一語よ！あゝ、先生の生命はとことばに此のせつなくも美はしい一語に宿る。

こえて七日、松本市同心町なる御宅に於て、告別式を営み、城山の焼場へお送りした。式に先立ち、折口先生がおいでになつて、佛の前に坐られたその瞬間、どこか

らともなく一羽の黒い小鳥がとんで来て、お膝にとまつて動かない。一同はふしぎに思つて、籠に入れておき、出棺の時、之を放つた。きれいな小鳥は、見る／＼遠く青雲のかたへ、永久に昇天してしまつた。あゝ！

昭和八年四月三十日印刷納本  
昭和八年五月三日發行

大和民族の生活信仰 定價八十錢  
送料六錢

長野縣東筑摩郡波多村四四一七番地

編輯兼發行人 和合恒男

東京市神田區錦町三丁目二五番地  
印刷人 文成社 前田宗松

長野縣東筑摩郡波多村四四一七番地  
發行人 瑞穂精舍

振替長野六七五七





